

# のろのろ砲弾の驚異

——金博士シリーズ・1——

海野十三

青空文庫



今私は、一人の客人を伴つて、この上海で有名な風変わりな学者、金博士の許へ、案内していくところである。

博士の住居が、どこにあるか、知っている人は、ほんの僅かである。人はよく、博士が南京路の雑鬧の中を、擦れ切つた紫紺色の繡子の服に身体を包み、ひどい猫脊を一層丸くして歩いて見かけるが、博士の住居を知っている者は、殆んどない。

金博士の住居は、南京路でも一等値段がやすく、そして一等繁

んじよう

昌ばかんしている馬環いちぜんめしやという下等な膳飯屋の地下にあるのだ。

「さあ、ここがその馬環です。どうです、たいへんな繁昌でしょうが」と私は、客人をふりかえった。「足の踏み入れようもないというのが正まさにこの店のことだが、第一このむーんとする異様な匂いには、慣れないものは大閉口だいへいこうで、とたんにむかむかしてくる。だが、とにかくこの中へ入っていかねば、博士に会えないのだから、一時鼻をつまんで、息をしないようにして、私についていらつしやい。邪魔になるお客さんは、遠慮なく突きとばしてよろしいのである。お客さんは、突きとばされて井どんぶりの中に顔を突込つっこもうと、誰も怒るものはいないであろう。遠慮していれば、いつ

までたつても、奥へ通れない。さあ遠慮なく、こうして突きとばすですな。しかし懐かいちゆうもの中物だけは要慎ようじんしたがいいですぞ。突きとばされるのを予め待っていて、突きとばされると、とたんにこつちの懐中物を失敬する油断のならぬ客がいるからね。あれつ、もうやられたつて。ああ待つた。もうさわいでも駄目です。一度やられると、たとえやつた犯人の顔がわかつていても、二度とお宝たからは出て来ないので。さわぎたてると、どうせろくなことにはならない。また何か盗とられます。生命いのちなどは、盗られたくないでしようから。

さあ、ようやく奥へ来ました。ここには小房しょうぼうが、いくつか並んでいる。こつちへ来てください。ここへ入りましょう。はい

つたら入口のカーテンを引きます。さあ、椅子に腰をおかけなさい。そして、両手でこの大きなまるテーブル卓子を、しっかりと抑おさえていてください。しっかりとつかまっていなないと、あとで舌を嚙かんだり、ひっくりかえって腰をうったりしますよ。はい、今うごきます。秘密の釦ボタンを今押ししましたから。そら床もろとも、下りおりだしたでしょう。しっかりと卓子につかまっていなさいといったのは、ここなんだ。そうです、この小しょう室全体が、エレベーター仕掛しかけになっているのです。床も天井も壁も、一緒に落ちていくのです。もう今はたいへんなスピードで落ちていますよ。なにしろ、これがエレベーターなら、地階三十階ぐらいに相当する下まで下りるので。なにしろ、地面から測って、二百メートルもあるそうですか

らね。

爆撃ばくげきをさけるためですかつて。もちろんそれもありましよう

が、もう一つの理由は、金博士は宇宙線を極度きょくどに避けて生活していられるのです。あの宇宙線なるものは、二六時中、どんな人間の身体でも、刺し貫さつらぬいているので……」

話の途中に、エレベーターは停とまった。

私は客人の手をとって、エレベーターを出ると、しばらくは真の闇やみの中の通路を、手さぐりで歩いていった。

二百メートルばかり歩いたところで、通路は行き停りとなる。

そこで私は、今切り取ったばかりのような土の壁を、とんとんと叩いた。すると、ぎーいと音がして、私たちは眩まぶしい光の中に、

放り出された。

そういう段取だんどりになれば、私は間違まちがなく、闇の迷路めいろをうまく選り通つてきたことになるのである。下手をやれば、いつまでたつても、この光の壁にぶつからないで、しまいには、進むことも戻ることすらならず、腹が減つて、頭がふらふらになる。

私は、はげしい目まいをおさえて、しばらく強い光の中に、うつ伏ぶしていた。土竜もぐらならずとも、この光線浴こうせんよくには参る。これも博士の警戒手段の一つである。

私は、ようやく光になれて、顔をあげることが出来た。

「やあ金博士。とつぜんでしたが、ロツセ氏を案内して、お邪魔じやまに参まいりました」



た。  
博士は、大の英国嫌いである。英国人と酒とは、大嫌いであつた。

## 2

「ほう、その人は、えいこくじん英国人じゃないだろうな。英国人なら、ここには無用だから、さっさと帰ってもらおう」  
と、金博士は、大きなウルトラマリン色の色いろめがね眼鏡を手でおさえながら、椅子のうえから立ち上ったのであつた。

「ああ博士。ロッセ氏は日本人です」

「本当か、綿貫君。わたぬき氏は、日本人にしては色が黒すぎるではないか」

綿貫とは、私の名前だ。

「氏は、きか帰化日本人です。その前は、インド印度に籍せきがありました」

「どうぞよろしく」

ロッセ氏は、りゆうちよう流暢な日本語で、金博士にあいさついんぎんな挨拶をした。

博士は、無言のままうなず肯いて、私たちに椅子を指すと、自分は再び椅子に腰をおろした。私たちの囲んだ机の上には、何をやっておびただいるのか分らないが、しへん夥しい紙片が散らばっていた。そして紙片

の上には、むずかしい数字の式が、まるで蟻ありの行列のように、丹た念んねんに書き込んであった。

「きようお連れしたロッセ氏は、電気砲学の権威です」と、私は紹介の労をとって、「ロッセ氏は、三ヶ月程前に、初速しよそくが一万メートルを出す電気砲の設計を完成されたのですが、残念にも、今日本では、それを引受けて作ってくれるところがないために、すっかりくさってしまわれたんです。それでこの上シャンハイ海へ、憂ゆう鬱ううつな胸を抱いて、なにか気分をほぐすものはないかと、遊びに来られたのですが、私は、博士を御紹介するのがよいと思つたので、実は、ロッセ氏には事前しぜんに何にも申さないで、とつぜんここへお連れしたわけですから、どうぞ話相手になってあげていただ

きたい」

私が思いがけなくすつかり底を割ってしまったので、ロッセ氏は、私の話の途中、いくたびも仰ぎょうてん天して、私の袖そでをひいて、話をやめさせようとしたほどであった。

博士は、かるくうなずいていたが、私の話を聞き終ると、

「それは、くさるのも無理ではない」

と、同情の言葉を洩もらし、

「わしは、あなたがロッセ氏であることは、今綿貫君の紹介で初めて知ったわけだが、しかしあなたのことは、電気砲の論文を読んで、前から知っていたよ」

と、たいへんいい機嫌きげんの様子で、立ち上つてロッセ氏の黒い手

を握った。

ロツセ氏の面めんじょう上じょうには、いたく感激の色が現れた。

「だが、ロツセ君。そんなに初速の早い電気砲をこしらえて、どうするつもりなんかね」

「これはしたり、そのような御たずねでは恐れ入ります。初速の大きいことは、すなわち射しやてい程ていが長いことである。しからば、われは敵の砲兵陣地ほうへいじんちないし乃至は軍艦の射程外にあつて、敵を砲撃することが出来るのです。こんなことは常識だと思ひますが……」

と、ロツセ氏は、羞はじらいながらこた応こたえた。金博士からメンタルテストをされたように感じたからである。

「そういう考えじやから、命中率はだんだん低下し、砲弾代など

が、やたらにかかるとのじゃ。射程には、おのずか自ら限度がある。ただ砲弾を遠方へ飛ばすだけなら、射程をいくらでも伸ばし得られるが、砲門附近の風速と、ふうそく弾着地だんちやくちてん点附近の風速とを考えてみても、かなりちがうのである。射程長ければ、命中率わろしである。そうではないか」

金博士は、鉛筆を握って、紙のうえに、しきりにだんどうきよくせん弾道曲線を描きつつしゃべ喋る。

「ですが、金博士。僕はぜひともいい大砲を作りたいと思つて、そのような初速の大きい電気砲を設計したのです。一発撃つてみて、命中しなければ、二発目、三発目と、しゅうせい修整を加えていきます。十発のうち、二発でも一発でも命中すれば、しめたもので

す」

「そういう公算的射撃作戦は、どうも感心できないねえ。なぜ、そんなに焦せるのであるか。もっと落着いて、命中しやすい方針をとってはどうか。ロッセ君、あなたの話を聞いていると、聞いているわしまで、なんだかいらいらしてくる。それでは、戦闘に勝てない。ロッセ君、あなたは日本人だというけれども、あなたの電気砲設計の方針は、日本人的ではないですぞ。それとも、近代の日本人は、そんなにいらいらして来たのかな」

色眼鏡いろめがねの底に、金博士の眼が光る。

ロッセ氏は、次第しだいに沈痛ちんつうな表情に移って、しきりに唇を噛かんでいる。私は、それをとりなそうにも、いすべき言葉を知

らなかつた。——ロッセ氏が、或る秘め事を、ここで告白するの  
でなければ、どうにもならないのであつた。

しばらく、息づまるような沈黙が、金博士の書齋に続いたが、  
やがて博士は、やおら椅子から立ち上つて、室内をこつこつと歩  
きだした。

「ねえ、ロッセ君」

「はあ」

「わしは君に、一つのヒントを与える。砲弾の速度を、うんと低  
下させたら、どんなことになるか」

「射程が短縮されます。技術の退歩たいほです。ナンセンスです」

「いや、わしのいつているのは、射程は、うんと長くとるのだ。」



ただ砲弾の速度を、極めて遅くするのだ。そして命中率を、百パーセントに上げることが出来る。それについて、一つ考えてみたまえ。解答が出来たら、また訪ねてきなさい、わしは相談に乗ろうから」

「砲弾の速度を下げるのは、ナンセンスですが……とにかく折角のおすすりめですから、一つ考えて来ましょう」

「そうだ。そうしたまえ。それが、うまくいくようなら、あなたの企図している英国艦隊一挙撃滅戦も、うまくいくだろう」

「えっ、なんですって」

「いや、あなたの懐中から掏った財布をお返しするよ。これは上から届けて来たものだが、いくら暗号で書いてあるにして

も、英艦隊撃滅作戦の書類を中に挟はさんでおくなんて、不注意にも、程がある」

3

外へ出ると、ロツセ氏は、大昂奮だいこうふんの面持で、私を捕とらえて、放そうとはしなかった。

「ねえ、綿貫わたぬき君。われわれは、もつと語ろうではないか。素敵すてきなブランデーをのませる家を知っているから、これからそこへ案

内しよう」

私は、初めから覚悟をしていたので、ロッセ氏のいうがままに、  
ついていった。

ホテル・クナンの、しずかな酒場の片隅に、ロッセ氏は、私  
を連れていった。

「この卓子は、僕の特約の席なんだ。では、お互いの健康を祝  
して……」

と、ロッセ氏は、琥珀色の液体の入ったグラスを高くさしあ  
げて、唇へ持っていった。

「ふう、これでやっと落ち着いた。金博士も、ひどいところを素破  
ぬいて、悦んでいるんだねえ。宿敵艦隊の一件が、あそこで

曝露ばくろするとは、思っていないかつた」

「まあいいよ。私も、すこし独断どくだんだったけれど、あなたを早く、博士に紹介しておいた方がいいと思つたもんだから、黙つて連れていったんだ」

「ああ、金博士は、驚異きょういに値あたする人物だ。一体あの方は、中国人かね、それとも日本人かね」

「そのことだよ」

と、私は、グラスの酒を、きゆうとのみ乾ほして、

「一体、金という名前は、中国にもあるし、日本人にもある。それから朝鮮にもあるんだ。もちろん満洲にもあることは、君も知つているだろう。ところで博士は、その中の、どこの人間だか知

らないといっている。博士は捨児すてごだったんだ。たしかに東洋人にはちがいないが、両親がわからないから、日本人だか中国人だか分らないといっている」

「赤ちゃんのときは、何語を話していたのかね」

「それは広東語カントンゴだ。もつとも、博士がまだ片言かたこともいえないと

きに、広東人の金氏が拾い上げて、博士を育てたんだからねえ、赤ちゃんのときに広東語を喋しゃべったのは、あたり前だ」

「ふしぎな人物だ。そして、あの穴倉あなぐらの中でなにをしているのかね」

「博士は、科学者だ。いや、もつと説明語を入れると、国籍のない科学者だ。国籍のない人といっても、ユダヤ系というわけでは

ない。博士は曰く、わしは国籍こそ無けれ、あくまで東洋人だといっている」

「で、博士は一体、毎日どんなことをやっているのか」

「博士は、なんでも、気に入った科学をとりあげて、どんどん研究を進めている。今は、宇宙線と重じゅうりよく力との関係を研究してい

るが、今までにも、たくさんるくさの発明がある。その中で、かなり古ふる

臭くさくなつた発明を、方々の国に売つて、莫ばくだい大な金を得ている。

博士の資産しさんは、何百億円だか見当がつかない。が、それよりも驚異に値するのは、博士の自主的研究は独得なる発展を遂とげ、今世界中で一等科学の進んだアメリカや、次位じいのドイツなどに較くらべると、少くとも四五十年先に進んでいると、或る学者が高く評価し

ている。だから、博士は、科学に関しては、世界の人間宝庫にんげんほうこであるともいわれている」

私が最大級の讃辞さんじを博士に捧げささげていると、ロッセ氏は、そうかそうかと、ペルシヤ猫ねこのように澄すんだ瞳ひとみをくるくるうごかして、しきりに感服かんぷくの面持おももちだった。

「だから、博士がうんといえ、あなたの設計した電気砲も、博士の秘密工場の手で実際に作つくってくれるだろう。そうすれば、あなたの念願ねんげんしている英艦隊えいかんたいの撃滅げきめつのことも——」

「いや、博士は、初速の速い電気砲が気に入らないらしい。むしろ、速度の遅い、そして射程の長い砲弾を考え出せといわれたが、僕には、何のことだか分からないのだ。なぜなら、速度を遅くする

ことと、射程を長く伸ばすこととは、互いに相傷あひぎずつける条件なんだからねえ」

「うむ、まるで謎なぞ々なぞだね」

「そうだ、謎々だ。それも解答のない謎々を出題されたような気がする。博士は、ひよつとしたら、僕をからかったのかもしれない」

「そんなことはないよ。博士は、からかうなんて、そんな人のわらうことはしない。ああまで真剣で、大真面目おおまじめなんだ。謎々をかけたにしても、博士は必ずその解答のあることを確たしかめてあるのだと思う」

「そうかなあ。速度の遅くて、射程の長い、そして命中率百パー



セントの砲弾！ そんなおそろしいものが、この世の中にあるとは、どうしても思われないが……いや、僕たちは、既成きせい科学に対し、すっかり囚しゅうじん人になっているのがいけないのかもしれない」

ロッセ氏は、そういつて、ぶるぶると身顛みぶるいをする、急いでグラスを唇のところへ持っていった。

## 4

私たちが外に出たときは、夜もだいぶん更けて、さすがの南ナンキ

京路シヨウロも、人影まばが疎まばらであつた。

二人は、アルコールにほてつた頬を夜風に当てながら、別に当てもなく、路のあるままに、ぶらぶら歩いていった。私たちの話題は、やはり金博士と、そして博士よりロッセ氏に与えられた奇怪なる謎々しゆうちやくとに執しゆうちやく着やくしていた。

それはもう、四五丁も歩いた揚句あげくのことだつたと思うが、ロッセ氏は、急に両の手を頭の上にのぼし、拳固げんこをこしらえて、まるで夜空に挑いどみかかるような恰好かっこうで、はげしく振り廻しはじめた。たいへん昂奮かうふんの様子である。

「おい、ロッセ君。一体、どうしたのか」

「うん。やっぱり、われわれは、金博士に騙だまされたんだ。あんな

ばかばかしいことが出来てたまるものか。砲弾が低速で走れば、たちまち落ちるばかりではないか。高速であればこそ、遠いところへも届く」

「それはそうだね」

「あの金博士の意地いじわる悪め。僕は、英艦隊を一挙いつきよにして撃沈げきちんしたいため、うまうまと博士の見え透すいた悪戯いたずらに乗せられてしまったんだ。ちくしょう、ひどいことをしやがる」

「……」

ロッセ氏は、天に向って、しきりに博士の名を呪いながら、停つては歩き、そして又停つては歩きした。よほど口惜くやしそうだった。

私は、博士のことを、そんな人物だとは思わないが、ロッセ氏から、のろのろ砲弾についての討論を聞いているうちに、だんだんと氏のいうところも尤もつともだと思ふようになった。

「なるほど、反対条件だねえ」

「博士よ、豚に喰くわれて死んでしまえ」

「まあ、そういうな。背後うしろをふりかえつてから、ものをいって貰おうかい」

ふしぎな声が、とつぜん、私たちのうしろから聞えたので、私ははっと思った。

「誰だ？」

「あつ！」

生れてからこの方、私はこんなに愕おどろいたことは初めてだった。悲鳴をあげると共に、私は愕おどろきのあまり、鋪道ほどうのうえに、腰をぬかしてしまった。なぜといつて、私が振り返ったとき、そこには声をかけた筈はずの誰もいなかった。しかし何物も居ないわけではなかった。私は、まつ黒の、大きな筒つつのようなものが、私の背中にもうすこしで突き当りそうになっているのを発見して、愕おどろいたのである。それは、どう見ても、口径こうけい四十センチはあると思う大きな砲弾であったのである。

「どうだ。この砲弾が見えるかね」

砲弾が、ものをいった。ふしぎな砲弾であった。そういいながら、砲弾は、私の鼻先はなさきを掠かすめてそろそろと向うへ、宙を飛んで

いった。大体地上から一メートルばかり上を、上から見えない針はりがねがねで吊つられたかのように落ちもせず、すーつと向うへいつてしまつた。そして最後に、私は、その砲弾が辻つじのところを、交通こうつう道どう徳とくをよく弁わえきた紳士のように、大きく曲まがつたのを見た。そして間もなくその怪あやしい砲弾は、ビルの蔭に見えなくなつてしまつた。なんとというふしぎなものを見たことであらうか。夢か？ 断だんじて夢ではない。

ふと、傍かたわらを見ると、ロッセ氏も、鋪アスファルト路ろのうえに、じかに坐まつていた。氏も、私と同様に、腰を抜かしたのにちがいない。

「見ましたか、今のを……。ねえ、ロッセ君」

私は、氏の肩を、ぽんと叩たたいた。

するとロッセ氏は、とつぜん吾れにかえつたらしく、ふーっと、鯨くじらのようにふかい溜息ためいきをついた。そして私に囁ささりついたものである。

「ロッセ君、しつかりしたまえ」

「見ました、たしかに見ました。しかし、僕は気が変になつたのではないだろうか。大きなまつ黒な砲弾が、通行人のように、落着きはらつて、向うへいったのを見たんだからね」

「それは、私も見た」

「砲弾が、ものをいっただししよう。あの声は、たしかに金博士の声だった。金博士が、砲弾に化ばけて通つたんだらうか。わが印度インドでは、聖せい者じゃが、一いち団だんの鬼火おにびに化けて空を飛んだという伝説は

あるが、人間が砲弾になるなんて……」

「ほう、なるほど。あの声は、金博士の声に似ていた。それは本  
当だ」

私は、ロッセ氏には答えず、思わず自分の膝を叩いた。

5

金博士秘蔵ひぞうの潜水軍艦どりゆうごう弩竜号きやくいんの客員きやくいんとなつて、中国大陸  
の某所ぼうしよを離れたのは、それから、約一ヶ月の後だった。



もちろんロツセ氏も、共に博士の客であった。

弩竜号は、おどろくべき精銳せいゑいなる武装船ぶそうせんであった。総トン数は、一万トンに近かったが、潜水も出来るし、浮かべばちよつとした貨物船に見えた。弩竜号に関しては、ぜひ報告したい驚異がいろいろあるが、本件の筋にはあまり関係がないから、ここには記さない。

弩竜号は、大陸を離れて五日目には、灼しやく熱ねつの印度洋インドように抜けていた。その日のうちに、セイロン島の南方二百哩カイリのところを通過し、翌六日には、早やアラビア海に入っていた。

「ソコトラ島とクリアムリア群島との、丁度ちやうど中間ちゆうかんのところへ浮き上るつもりです」

と、金博士が、地図の上を指でおさえながらいった。

「博士、もつと、例の反重力弾はんじゅうりよくだんのことについて、話をしたいだけましよう」

「ああ、あなた方を愕かしたあのものをいう、のろのろ砲弾のからくりのことかね。印度洋へ入ったら、いう約束だったから、それでは話をしようかね。からくりをぶちまければ、他愛たあいもないことなのさ。砲弾が、ものをいったのは、砲弾の中に、小型の受じゅし信機しんきがついていて、わしの声を放送したんだ」

「それは、もう分っています。それよりも、なぜ、あのように低速で飛ぶのですか。落ちそうで、一向いっこう落ちないのが、ふしぎだ」

「それは、大したからくりではない。重力を打消うちけす仕掛しかけが、あの

砲弾の中にあるのだ。これはわしの発明ではなく、もう十年も前になるが、アメリカの学者が、ピエゾ水晶片すいしょうへんを振動させて、油の中に超音波ちょうおんぱを伝えたのだ。すると重力が打消され、油の中に放りこんだ金属の棒が、いつまでたっても、下に沈んでこないのであった。その話は、知っているだろう」

「ええ、その話なら、知っています」

「そのアメリカ人の着想ちやくそうに基もとづいて、わしが低速砲弾に応用したんだ。つまり、砲弾の中に、それと似た重力打消装置じゅうりよくうちけしそうちがある。もし重力を完全に打消することができたら、砲弾は、地球と同じ速さで、地球の廻転と反対の方向に飛び去るわけだが、それはわかるだろう」

「なるほど、なるほど」

と、私も前へのり出した。

「しかし、重力をそれほど完全に打消さず、或る程度打消せば、それに相当した速度が得られる。低速砲弾においては、ほんのわずか重力をうち消してあるばかりだ。それでも、途中で地面に落ちるようなことはない」

「それはいいが、砲弾の飛ぶ方向は、どうするのですか」

ロッセ氏が、息をはずませて訊<sup>き</sup>く。

「それは飛行機や艦<sup>かんせん</sup>船と同じだ。舵<sup>かじ</sup>とか帆<sup>か</sup>とか、そん

なものをつけて置けば、いいのだ。操縦は遠くから電波でやって

もいいし、砲弾の中に、時計仕掛<sup>とけいじかけ</sup>の運動制御器<sup>うんどうせいぎよき</sup>をつけておいて

もいい。——それはまあ大したことがないが、わしの自慢したいのは、この砲弾は、はじめに目標を示したら、その目標がどつちへ曲ろうが、どこまでもその目標を追いかけていくことだ。だから、百発百中だ」

「ほう、おどろきましたな。目標を必ず追いかけて、外はずさないなんて、そんなことが出来ますか」

「くわしいことは、ちよつといえないが、軍艦でも人間でも、目標には特殊な固有振動数こゆうしんどうすうというものがあつて、これは皆違つている。最初にそれを測はかつておいて、それから砲弾の方を合わせて置けば、砲弾は、どこまでも、目標を追いかける。先夜せんや、あなたもつとがたを追いかけたのも、その仕掛けのせいだ。尤も、君

たちに会えば、用がないから、わしのところへ戻ってくるように調整しておいたのだ。これはわしの自慢にしているからくりじゃ」「なるほど。そんなことになりませんか」

と、感心しているとき、監視部かんしぶから電話がかかってきた。敵艦隊が遂に現れたというのである。博士は、すぐさま弩竜号に、浮揚ようを命じた。

「二百発の低速砲弾を、敵の四隻せきの巡洋戦艦じゆんようせんかんに集中する。一艦につき五十発ずつだ。五十発の命中弾をくらえば、どんな甲かんぱ鉾へんでも、蜂はちの巣になるじやろう。しかも、第一発が命中した個こ所しょを、次の第二弾が又同じ個所を狙ねらって命中するのだから、まるで、錐きりでボール紙の函に穴をあけるようなものじや。まあ、見て

いたまえ」

博士は、テレビジョンの映幕スクリーンを見ながら、八門もんの四十センチ砲の射撃を命じたのであつた。二百発の砲弾は、まるでいらずら小僧こぞうの群むれを襲う熊蜂くまばちの群のように、敵艦にとびついていったが、まことにふしぎな、そして奇怪な光景であつた。それから十五分ほどたつて、四隻がてんでに舷側げんそくから火をふきながら、仲よく揃つて、ぶくぶくと波間なみまに沈み去つたその壯觀そうかんたるや、とても私の筆紙ひつしに尽し得るものではなかつた。

ロッセ氏は、映幕スクリーンの前に、金博士の手を握り、子供のよう  
に慟哭どうこくした。余程嬉よほどうれしかったものと見える。無理もない、それは確実に、印度民族奮起ふんきの輝かしき序幕を闘いとおつたことになる

のであったから。

しかしその日の新聞電報は、地中海から廻航かいこうちゆう中の英艦隊が、例によつてドイツ潜水艦のため、多少の損傷そんしょうを蒙こうむつただけ報ぜられ、四隻とも即時撃沈そくじげきちんされたことにも、また金博士の弩竜号が活躍したことについても、全然触れていなかつたのは、どうしたわけか、私には一向分らないところである。



# 青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第10巻」三一書房

1991（平成3）年5月31日第1版第1刷発行

初出：「新青年」

1941（昭和16）年4月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力…tatsuki

校正…まおや

2005年5月15日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# のろのろ砲弾の驚異

—金博士シリーズ・1—

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

著者 海野十三

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>